

AO入試の現在、未来

慶應義塾大学
環境情報学部
石崎 俊

SFC・AO入試の始まり

- 1990年度からスタートし、14年間実施
- キャンパスの創設と同時に開始
- 日本型AO入試制度の試み
- 一般入試や推薦入試と異なる方法
自己推薦方式
入学後の活躍を期待できるか判断
問題発見・問題解決の基礎能力

アドミッションポリシー

- SFCにふさわしい学生像
SFCが表現し発信する必要性
5つの領域
- AO入試でどう判定し、獲得するか
入学後の活動を受験生が自分で主張
- 入学後にどう育てるか
クラスター制度 15の専門分野

日本型のAO入試

- アドミッションオフィス
米国では
入学願書だけ、統一試験、高校の成績
職員が選考、全学的な規模
- 日本型の特徴
面接重視
教員が深く関与
定員の一部

AO入試組織体制

- 専任のスタッフ職員
当初2名、その後4名でGAOも
- 教員は交代
環境情報学部と総合政策学部
10名ずつ、合計20名＋α
- 4月入学用に2回、9月入学用に1回実施
AO入学定員200名

AO入試のコスト

- 受験生一人に30分の面接

受験生あたり	4時間あまり	
教職員あたり	担当教員	60時間
	職員	330時間
- 教育コストの減少
入学時に学習テーマが明確化
教育効率の向上

入学後のフォローアップ

- 入学直後の研究発表会
入試合格決定から入学までの課題、4月第1週実施
- 入学1年後のフォローアップ面接
学業生活の問題チェック
- 入学後の追跡調査
成績など
- 卒業前の面接
4年間の総括

AO入試の課題

- 受験生の画一化
面白い学生の減少
- 入試提出資料の負担
受験生にとって多量の資料作成
- 大学院教育までの縦のつながり強化
入試から学部教育、大学院教育へ連携
クラスター制度、プログラム制度
- 高大連携